

誰にもできる子どもの絵の診断

クリエイティブセンターみかわ

所長 杉浦 堂之

～平成19年 深層心理士・深層心理カウンセラー養成夏期認定研修会テキストより～

①子どもの絵は心の表現であります。

「Aちゃん、なに描いてるの？」

「ゾウさん」

「ゾウさんならお鼻が長いでしょ。ずいぶん短いね。ネコさんみたいなゾウさんだね。」

「これでいいんだもん。」

「もっと長くかかなきゃ。これぐらいに…。」



母子の間で、子どもの絵を囲んでこんな会話がよく交わされます。心の交流をすることは大切なことですが、たまたま、子どもが表現したいと考えていることにケチをつけたり、飛躍しようとする心にフタをしないように十分注意したいものです。

「Aちゃんの絵、ずいぶん下手なのね、お父さんに似たのかしら…。」

「お母さんの子なら、もっと上手なはずなんだけど」「やっぱりダメね、先が思いやられるわ」などど、たびたび言われると、信頼している父親もダメ、自分もダメ、くさしてばかりいる母親もダメ、みんなダメ人間になってしまい、創作欲、表現欲が抹殺されるばかりか、ストレスがたまって憂さ晴らしのほけ口を弱いものいじめに求めることになるかも知れません。

「人はなぜ働くのか？」「なんのために生きるのか？」と言う問題も、優しく言い換えると、自己表現をしたい、自己実現をしたい、自己顕示したいなど、心の表現をしながら、生き生きと働くことを楽しむ、ということでしょう。

②子どもの絵をとおして、良き話し相手になりましょう。

これは、子どもも大人も、昔も今も、これからも変わらないことです。子どもは、とくに幼児は言葉や文字による表現は思うにまかせないので絵に描いて気持ちの表現をします。それは心の中にあるものを、外界の形を借りて表すもので、表れた形は手段であって目的ではありません。その手段としてのゾウさんやキリンさんや花が、写真のように似ていなくてもいいのです。写真のように描くのは昔のことで、昔は写真がなかったので、絵で代用しようとしたのです。

戦前の図画は、手本をまねて描き、如何に上手にまねるかに腐心しました。写真の発達とともに、上手にまねるなら写真を撮ればよいことになり、子どもの絵は写真とは違う、子ども自身の内面描写なのだ気づき、心の内面を太らせ、創造的に自己表現をさせよう、その場も保証しよう、ということに移り進んできました。これは明らかに大きな進歩だと思います。

そういうわけで、子どもの絵はそのときどきの心の内面を何らかの形を借りて写し出されたものですから、同じゾウを描いても、活発な子、消極的な子、あきっぽい子、情緒不安な子、体験の浅い子…によって表し方が違います。これは人物を描いても同じです。イライラしているときは、そのイライラがすぐ絵に現れます。

大人が窮地に立たされたとき、話し相手を見つけて、いろいろ話していると、ただ話したと言うだけで気分がいくらか楽になるのと同じで、子どもはブツブツ言いながら憂さを絵にして紙にぶつけることによって気分を晴らします。これを周りの大人が読みとって、そのイライラの原因を探り、どうすれば取り除き解消できるか、当人とその対策発見に努力することが大切なことなのです。

